

一色いろははやっぱり
あざとかった♡

ぼるびっく♡

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一色いろはが先輩こと比企谷八幡と出会ってから変わっていく自分に迷いながらも、自分の”本物”を探していく。

いろはすと八幡、奉仕部の出会いから初めて、アニメに沿いながらもオリジナルをまぜていきたいと思います。

通常いろは目線で書いていますが、途中他のキャラ目線も入れていきたいと思いません。

目次

- | | | |
|-----|-----------------|----|
| 1 話 | 一色いろはは出会ってしまった | 1 |
| 2 話 | 一色いろはの親友はただ物ではな | 1 |
| い | い | 21 |
| 3 話 | 教育実習生はあの人だった | 21 |
| 4 話 | 奉仕部に来た教育実習生 | 35 |
| 46 | | |
| 5 話 | 一色いろはのクリスマスが動き出 | |
| す | す | 60 |
| 6 話 | イベントが始まり一色いろはは | 67 |
| 7 話 | 一色いろははまたやってきた | 72 |
| 8 話 | 先輩との会議が始まる | 81 |
| 9 話 | せんぱいとのかげり道 | 89 |

1話 一色いろはは出会ってしまった♡

わたしは生徒会長の城廻先輩と呼ばれて、生徒会室にいる。

わたしは総武高校1年の一色いろは。

サッカー部のエースで次期部長の葉山先輩に憧れる可愛いマネージャー♪
。。。つて誰に説明してるの？わたしは。

城廻先輩の話だと、わたしが次期生徒会長選挙に立候補してるとのこと・・・

「あのお・・・わたし立候補した覚えはないんですけど」

城廻先輩は推薦人リストを見せてくれた。

そこには30人もの推薦人の名前が・・・

うわあ・・・マジかあ。。。

どうやらわたしは勝手に立候補されてしまったらしい、わたしを妬む誰かによって。

わたしは普段から周りの男子に愛想振りまいてるのでそれを快く思わない女子も多い。
い。

きっとその中の誰かがわたしを陥れようとしたのだろう。

「はあ……」まいったなあ。

わたしが勝手に立候補されただろうということと、生徒会長になるつもりはないことを伝えると

平塚先生に相談することとなり、平塚先生は『奉仕部』を紹介してくださいました。

そう……これがわたしと先輩の、奉仕部の3人との出会い。

その時のわたしはこの出会いがわたしをこうも変えるとは知る由もなかった。

平塚先生に付いて行くと普段来ることのない特別棟のある教室の前に。

コン！コン！

ノックをして先に入った先生に呼ばれた。

中に入ると長い机の窓側の席に雪ノ下先輩がいた。

雪ノ下先輩は学校でも有名なので名前くらいは知っていたが話をするのは初めて。噂通り美人で黒く長い髪がとても綺麗な凛とした人だった。

少し離れた席には結衣先輩。

「あつー！いろはちゃん。」

「結衣先輩、こんにちわ♪」

「やつはろー！久しぶり」

結衣先輩とは挨拶くらいしかしたことはなかったが、知った顔の人がいるのは少し安心できた。

そして雪ノ下先輩とちようど反対側の奥側の席に腐ったような目をした先輩がいた。

わたしは初めて先輩に会った時の印象は腐ったような目をしていることくらいしかなかったが、

いつものように可愛くあざとくニツつとすると、先輩の眉がピクリと動き警戒されたのを覚えている。

わたしの『可愛いアピール』にまったく反応もせず、警戒さえしたこの先輩をちよつとだけ気にしているわたしがいた。

今までそんな反応をした男の子はいなかった。

いや、正確には見抜いてた人はいたけど、この先輩は反応が違っていた。

事の成り行きを説明すると先輩が一つの意見を出したが、その時結衣先輩が寂しそうな表情をし、雪ノ下先輩が

先輩の意見に反対すると何となく違和感のあつた場の雰囲気さらにギスギスしたように感じた。

結局意見はまとまらず平塚先生の提案でまた後日話をする事になった。

後日奉仕部の3人とわたしで話し合ったが、さらに雰囲気が悪くなるのを黙って見ているしかなかった。

先輩は一人先に部屋を出て行ってしまった。。。

またも意見はまとまらないまま・・・わたしどうなっちゃうんだろ？

このまま生徒会長になっちゃったりするのかな？と不安になった。それと同時に先に席を外した先輩がまた少し気になったような気がしていた……

わたしは部屋を出て行つた先輩を探し声をかけていた。

本当に大丈夫か心配になつたから……

わたしが不安いっぱい質問すると

先輩は「まあ最悪どうにかする」と言つてくれた。

その言葉がとても嬉しかった。

だれも助けてくれない……奉仕部に相談はしたけどあの3人様子をみていると不安しかない。

そんなわたしの心を先輩のその言葉が妙に安心させてくれた。

そして……私はハツとして部活に行くと言つてその場を立ち去つた……（なんだろうこの気持ち？）

家に帰つたわたしは昨日までとは少し違つていた。

昨日までは不安で不安でどうしようもなかった。

しかし今日は少し落ち着いていた、先輩のあの言葉が何故か安心させてくれる。

今日はぐっすり眠れそうだ。

その時携帯が鳴った。

携帯をとると陽花からの着信だった。

そう、彼女は小泉陽花。

小学校からずっと一緒に親友。

あつ!!わたしだつて女の子の友達いるんですからね。

お昼もわたしと陽花とあと2人（後で紹介できるかな？）の仲良し4人組で食べてるんですから。

。。。 つてわたし誰に説明してるんだろ？

「いろは、大丈夫？」

「陽花どうしたの？」

「最近のいろは生徒会長選挙のことで元気なかったから..」

「でも何かあった？少し元気でたみたいじゃん（声が学校の時より落ち着いてる）」

「そう？何も無いよ？でも心配してくてありがと。」

「まだどうするか決まってるから不安だけど、何とかなるかな？つて」ニコツ

「やっぱり何かあったんじゃない、あんな不安そうだったのに嬉しそうじゃん？」

「そんなことないって、不安でしょうがないんだからあ。」

「はいはい（いろはから言ってくるまで待つか）」

「何それ？その適当な返事。」ムウー

「ごめんごめん、でも声聞いたら少し安心したわあ（まったくいろはは分かりやすいんだから）」

「じゃあ、また明日学校でねー!!おやすみ〜」

「うん、おやすみーはるか♪」

心配して電話してきてくれた親友の陽花は何故か安心して電話を切った。

何だかわからないけど、あの子と話すとすごく落ち着くなあ…

放課後買いたい物があつたのでサッカー部のウザいけど使え…頼りになる戸部先輩に付き合ってもらっていた。

すると憧れの葉山先輩と一緒にいる先輩に会った。見知らぬ女の子2人も一緒に。

何故か先輩を見つけてニコツつとしたわたし。

葉山先輩がいたのに先輩が気になってしまった。

あれ？葉山先輩に会って嬉しかったんだよね？わたし。

と、自問自答してみたが・・・

葉山先輩と話をする戸部先輩を尻目に先輩の横にいた。

憧れの葉山先輩がいるのに何故か先輩の近くにゐるわたし・・・あれ？何で？

「せんぱいっ♪」

「せんぱいどうしたんですう？あつ！遊んでるんですかあ？」

と言ってみた。本心は『わたしの依頼忘れて女の子と遊んでるとかいい度胸だな』
だったんですけど（笑）

「べ、別に遊んでるわけじゃ。。。」

先輩が少し困った顔になり目をそらしたところなので、先輩の制服を引っ張り先輩の耳
元で

「てゆうーか、あの女なんですか？あつ！せんぱいの彼女さんとか？でも2人いるじゃないですか？どういう繋がりですか？」

とめいっぱいの笑顔をしていたが低い声で素のわたしを出していた。

え??わたし何で素を出してるんだろ?せんぱいに。

違う違う、葉山先輩と見知らぬ女の子がいたから気になっただけだよね??

戸部先輩が葉山先輩と話してたから先輩に聞いただけだよね??
普通女の子がいたら葉山先輩の彼女かかな? って思うよね? それなのにわたしっ
たら先輩の彼女さんとか? って聞いてるし。

「いろは、ごめん。俺が付き合ってもらってるんだ」と葉山先輩が答えてくれた。

葉山先輩と先輩ってよく遊ぶのだろうか?

葉山先輩と先輩・・・何か一緒に遊ぶの想像できないんだけど。

気になったわたしは葉山先輩と先輩の関係が気になり、いつものように可愛く一緒に
遊ぶ提案したが

葉山先輩に気を回した戸部先輩によってその場を後にすることに。

戸部えく：・

もうその時は一緒にいる見知らぬ女の子に興味はなかった。あのくらいならわたし
の相手にならないし。

その夜わたしはお風呂に入った後自分の部屋に戻り今日の出来事を思い出していた。
考えてもわからなかった。。。

でも、あの腐った目をした先輩に少し興味をもったのは確かだ。
わたしの『可愛いアピール』が通用しない先輩に…

選挙まであと数日と迫った日のお昼、うちのクラスの男子に2年の先輩が呼んでると
言われ、もしかして葉山先輩と思つて

振り返るとそこには先輩がいた。

思わず肩を落としてしまったわたしを見てちよつと気を落とした先輩が目に入った。
先輩に図書室に連れて行かれ黙々と作業をさせられる。

何でわたしがこんなことを…

でも先輩と二人つきりでと考えると少し緊張しちゃう。

「せんぱーい♪これ書き写すの超辛いですよお」

わたしは緊張をほぐすため言葉を発した。

まあ本当に面倒くさかったし。

はあ…

そうだこの前会った時のこと聞いてみよ♪

「あ…：… ってゆうかこの間遊んでた人って葉山先輩の彼女とかですかあ？」
「どうだろうな…：…」

うっ…：… つれない返事

じゃあ♪

「ええー、教えてくれてもいいじゃないですかあ」

「これ終わったらな」

「まあもう来るかあ。」

「まああれくらいならそんなに問題なさそうですしいですけどねー」

「と言うと先輩がのってきた。」

「てゆうか葉山のこと好…：… どう思ってるの？」

「あれ？先輩もしかして少しはわたしのこと気にしちゃってます？」

「はあ…：… 何ですか口説いてるんですかごめんなさい無理です、好きな人がいるので」

「これが初めて先輩を振った時♪」

「そうじゃねーよ、単純にどう思ってるのか聞きたかっただけだ」

「うーん、どうなんでしょうねー。何かいいなあと思っただけであえず手をダ…：… 繋いでみたいなあと思いますけど」

「オツと危ない。。。」

とりあえず話を戻して

「ねえー、せんぱーい♪これってやる意味あるんですかあ?」

「まあなくはないな」

ほんと何でわたしこんなことしなくちやいけないの、昼休みに。

「何か言い方が曖昧なんですけどお」

「一色が何をどうしたところで雪ノ下と由比ヶ浜には勝てないからなあ」

「そうゆう意味じゃあ、無意味だ」

わあ、それちよつと酷くないですかね。ムスツ

わたしだって..

「まあ別に勝てなくていいんですけど、でもお、もしかして案外勝っちゃったりしたら怖いなあって..」

「勝てる部分ないだろ..」

先輩酷くないですかー、まあ実際あの二人はすごい人だし..

「はあ。。。まあ。。。」

「それに最初の推薦人の連中だつて一色には投票しないし」

そんなこと分かつてますよ。ムウツ

「そいつら今頃大爆笑だろうな。」

「んで、選挙に負けた姿を見てさらに爆笑。」

「この人何でわざわざこんなこと言うんだろ？」

「そうゆうの腹立つよなー」

「そんなの当り前です!!」

「やっぱやられたらやりかえさないとなー」

ん? どういうこと?

それができるんだつたらしたい。

わたしだつて悔しいし(思わずシャーペンを持つ手に力が入った)

「はあ、まあ、できたらいいですn」

「できる」

えっ！わたしは先輩の顔を見た。

すると先輩はさつきからずつと作業している書類を持って「さつきから書いてもらってるこれ何だと思う？」

これくらいわたしだつて分かる。

「推薦人名簿ですよねー」

「そうだ、ただし…一色いろはの推薦人名簿なんだ」

はあ。。。ん？。。。えっ??

「あのお、わたしもう推薦人集まってるんですけど…」

何で何で??何でわたしのなの？

「推薦人の規定は30人以上だ。何人集めてもいいんだよ。」

と書類をわたしの前に置く先輩。

「ネット上で一色の応援アカウントが稼働してたんだ。」

「全校生徒の1/3。これだけの支持者がいれば勝てる」

は？先輩何言ってるんですか？

「い、いきなり言われても無理ですよ。てゆうか、なつても結局出来ないと思うんです」

よね。。。」

「あんまり自信ないってゆうか、それに部活もあるし。。。」

先輩は真面目な顔で続ける

「まっ、確かに両立は大変だな。でも得るものは大きい。何だと思う？」

この展開は何？

先輩どうしてこうなったの？

「まあ、経験とかじゃないですかねー。」

「あと内申とか、てゆうかせんばい先生みたいです。」

わたしは先輩が急にわたしの生徒会長に推すこの状況がわからず先輩を見た。

すると先輩は

「違うな、いいか。。。お前が得るのは・・・」

と言い、急に誰かの真似をして。。。

「1年生で生徒会長なのに頑張って部活に出てくるわたしいー♪だ。」

は？それってわたしの真似じゃないですよねー？

うわあ、思わず引いてしまった。

先輩は続ける。

「1年生なら失敗しても許されることもある。その上生徒会がたるい時は部活を言い訳にできる。逆もまた然りだ。」

何でこの展開になったかまだ分からないわたし。

「で、でもやっぱり大変ですよねー… みたいな」

「そうゆうときは葉山に相談すればいい。」

はっ!!先輩って…

「なんなら手伝ってもらえ!部活の後なら家まで送ってもらえるアフターケアまでついてくる。」

「もしかしてせんぱいって頭いいんですか?」

わたしはさっき先輩が言ったことを頭で繰り返しながら質問した。

完璧に素になっていた。

「まあな。」

先輩が何故急にわたしを生徒会長にしようとしているのかは分からない。

それにわたしじゃ全校生徒の1/3の支持を集められないことくらい分かってる。きつと先輩が裏で何かしたんだろう…

しかし、これは使えるかも…

先輩は生徒会長になりたくないわたしを生徒会長に推したことになる。

きつと先輩は少なからず私に負い目を感じてるはず…

これを理由にこの後も先輩を利用できるかも。。。

わたしの『可愛いアピール』が効かない先輩に少し興味あるし。。。

こころは…

「ま、これだけ支持されたらしようがないですねー。その提案はそれなりに魅力的ですし。」

「それに… クラスの子に陰で笑われるのも嫌ですし。」

よし。決めた!!

「せんぱいに乗せられてあげますッ♪」

いつもの『可愛いアピール』で言った。

先輩は少し驚いた後フツと笑っていた。

やっぱり先輩には効かないなあ。。。

家に帰って落ち着いた後自分の部屋で考えてみた。

わたしに生徒会長なんて出来るのかな？

でも、困ったときは先輩をりよ…頼ればいいんだ。

わたしを生徒会長にした責任を取ってもらわないと。

そんなことを考えていると、携帯が鳴った。

陽花からの電話だった。

「あつ、はるかどうしたの？」

「いろは、今日お昼休み出て行っただけだと思っただけだ。帰ってきてご機嫌みたいだったけどどうしたの？」

「学校では聞く時間なかったからさ…」

「わたしね、生徒会長になることにしたから…」

「えっ？いろはあんなに嫌がってたじゃん？」

「うん、でもね楽しみができたの♪」

「へ？そ、そうなの？何々？」

「へへへ、今はまだ秘密♪」

「もー、もったいぶってえ．．．でも言える時が来たら教えてね。」
「うん、もちろん♪」

陽花はちゃんとしたしのこと分かってくれてるからそれ以上は聞いてこない。
やっぱり親友っていいなあ。

「でも、いろはが生徒会長かあ．．．わたしの親友が生徒会長なんてわたしも嬉しいなあ♪」

「頑張つてね、いろは!!」

「ありがとう、はるか♪」

いつかきつと話すからね。

今はまだわたしも．．．

わたしは生徒会長になりました。

その初日先輩が生徒会室に来てくれました。

「今日からもう仕事か？」

「そうなんですよー、ま、最初はどうにもならないと思いますけど」

すると先輩は

「来年、俺のの妹が入学するんだ。」

思わず先輩の方を向いてしまった。

はあ？

「だからいい学校にしてくれよ！」

何か先輩らしくない言葉。

だけど…

「えっ？、、、何ですかそれ口説いてるんですか？ごめんなさい狙いすぎだし気持ち悪くて無理です」

これで先輩を振るの2回目ですね♪

今まで誰にもこんなことしたことなかったけど、何故か先輩にはしてしまおう。決して照れ隠しなんかじゃないんだから♪

2話 一色いろはの親友はただ物ではない♡

今わたしはお出掛けの準備をしている♪

今日は陽花達が生徒会長の就任祝い？と称した女子会をしてくれるらしい。

メンバーはいつもの仲良し4人組♡

まずは小泉陽花（こいずみ はるか）♪

みなさんも知ってるわたしの小学校からの大親友!!

同い年なのにとつても落ち着いていて大人っぽくて『可愛いアピール』をしているわたしから見てもとても可愛いわたし達のお姉さんの存在♪

髪型のショートボブがとつても似合ってる♡

しかしとつても大人っぽくしてお姉さんのんだけど、ちよつとドジっぽいところもあるお茶目さんなの。

それでいてとつても頭が良くて小さい頃からずっと学年1位とかいう秀才さんでもある。

何かもうわたしより陽花の方が生徒会長なんじゃない？とか思ってしまう。

そして次はお待たせの初登場♪

誰も待つてないとか言わないでくださいねー。

ええーと、中学2年の時一緒のクラスになって仲良くなった七海希望（ななみ のぞみ）♪

綺麗な黒髪ボブデイの眼鏡っ子ちゃん。

で、そうみなさんのご想像通りのちよっぴりヲタちゃん♪

そんな希望はわたし達のムードメーカー的存在で、しかも陽花ほどではないけど成績はいつも上位。

わたしのまわりって何でみんなこんなに頭いいの…

最後はこちらもお待たせの初登場♪

だから待つてないとか言わないでくださいねー。泣いちゃいます（笑）

この子は総武高校に入学して仲良くなった笠原美沙（かさはら みさ）♪
付き合いは一番短いけどわたし達のアイドル的存在。

ボブがとつても似合ってる童顔の妹系!!

どれくらい童顔かという中学生に間違えられるのは当たり前で、小学生に間違えられることもしばしば。

ちなみに身長も一番低かったりする。

だからわたし達3人は美沙が可愛くてしょうがないんです♡

あつ、勉強のことは言わないでやってください（笑）

さあ今日はそんな3人と千葉駅近くのお洒落なカフェで女子会なのである。待ち合わせの11時にはまだ時間ある…って、もうこんな時間？

でもほとんど準備を終わっていたわたしは最後に鏡でチェックして出発した。

よし！今日も可愛い♪

わたしが待ち合わせ場所に着くと陽花がもう待っていた。

この子はしつかりさんだけあって必ず時間の10分前には来ている。

わたしも早く行く方だけどいつも陽花のが先に待っていてくれる。

さすがお姉さん系ですな♪

しかしいつも困るのが希望と美沙の2である。

この2人ときたらルーズとか通り越しててくらいに時間の感覚がない…

まあいつものことなんでもいい加減慣れましたけどね…

なんて言っていると手を振りながら近づいてくる美沙の姿が。

今日は珍しく時間ピッタリである。

陽花に「美沙時間ピッタリだねー♪」と言われて小さな胸を張っている。たまに時間通りに来たくらいで・・・はあ。

。。。時計の針は11時10分を過ぎたところ・・・

そろそろだなあ・・・あつ！やつぱり。

陽花が希望に電話していた（これいつものパターン笑）

そしていつもの陽花の小言・・・

陽花によると希望はまだ寝ていたらしい。

まったくあの子は。。。。

30分後到着した希望は今陽花の前で正座をしてお小言を聞いております。

「まったく希望は何回いったら分かるのお・・・」

「だつてえ。。。。」

「だつて何？ちゃんとした理由あるの？寝ただけでしょ!!」

「はい、滅相もございません。」

もう土下座しそうな勢いです。

陽花さん、もうその辺にしないと近くを通る人の目が・・・

そんなこんなで目的のお洒落なカフェに着いたわたしたち。

陽花が席を予約していてくれたらしく、12時に。

さすが陽花と思いつながら席に着くわたし達。

まずはみんなで乾杯をしようとなりそれぞれ飲み物を頼む。

もう寒い時期なのでみんな暖かい物を注文!!

わたしはミルクティー、陽花がストレートティー、希望はカフェオレ、美沙はココア
(お子ちゃまだ笑)

希望が乾杯の音頭をとってくれる。

さすがムードメーカーですね。

「いろはの生徒会長就任と私達の友情にかんぱーい♪」

「かんぱーい♪」「かんぱーい♪」「かんぱーい♪」

「はあ… あったまるわあ♪」

「希望、おっさんみたいだから笑」と陽花。

わたし達はお昼の食事を一緒に済ませてしまう為、それぞれ注文しワイワイ、ガヤガヤしながら食べていく。

食事も終わって、デザートケーキを食べながらのんびりしていると美沙が口を開く。

「いろはちゃんは、どおーして急に生徒会長になることにしたの？」

「うんうん、最初はなりたくないって言ってたよねー。」と希望が続く。

陽花はわたしが言えるようになったら言うと言っていたので少し不安そうな顔をしていた。

わたしの生徒会長就任のお祝いで開かれたこの女子会だから当然この質問は出ると思っ、わたしは昨日の夜から決めていた。

「ええ〜とお、まず何から話そうかなあ…。」

「いろは、言いたくないこともあるかもだから無理しなくてもいいよ」

さすが大親友すかさずフォローしてくれる。

その言葉に希望も美沙も頷いてくれる。

「ええーとね、最初はサッカー部のマネージャーをしながら生徒会長なんて無理だっと思つてある部活に依頼して何とか」

生徒会長にならないようにしてもらつてもりだったの。」

「へえー、そんな不思議な部活があるんだね」と陽花が少し興味があるみたいに聞いてきた。

あら？陽花さん？フォローしてくれた割には興味津々じゃない？

「うん、わたしも知らなくて平塚先生に相談したら連れて行つてくれたの。」

3人とも真剣に聞いている。

でも、ここからちよつと飛ばして先輩に生徒会長を勧められたとこの話をしようと思う。

詳しいことはまたその時が来たら話すから…

「でね、ある時その奉仕部の先輩がわたしに魅力的な提案をしてきてね」ニコッ♪

「わたしにこんな提案してくるこの人は何なんだろう？つて興味を持ってね、その人の提案に乗せられることにしたの。」ニコッ♪

「その提案でね、困ったら葉山先輩に相談すれば、部活終わりに送つてもらえとか、部

活を理由に生徒会さっぼったり、その逆もとか普通

そんなこと考えないでしょ？」ニコッ♪

「そんなこと平気で言ってくるんだよ」ニコッ♪

「それにね、その人ってわたしの『可愛いアピール』がまったく効かないんだよ♪」ニコッ♪

「ちよつと興味持ちちゃうよね♪」ニコニコッ♪

「って、何々?? 3人ともぽかーんみたいになってるけど??」

「どうしたの?」

陽花がハッ!つとして答える。

「えっ? そんなことで簡単に決断しちゃってよかったの? 生徒会長って大変でしょ?」

「大変な時は先輩をつk… 頼ればいいし♪わたしを生徒会長にした責任とつてもらって♪」

ピシッと敬礼を決める。

「そっかあ♪いろはが決めたことなら私は応援するよ!!」と陽花が笑顔で言ってくれた。

3人は「私達にできることがあつたら言つてね」つて言つてくれた。

「生徒会の手伝いとかは大変だと思ふから、わたしが疲れたり困つた時は話聞いてね♪」
つて言つたら3人も満面の笑みで「もちろんだよ♪」つて言つてくれた。

これから生徒会にサッカー部のマネージャーを色々大変で辛くなることもあると思ふ。

そんな時陽花達この3人がいたら心強い!!

そう思えたら生徒会頑張らなきゃって元気が出て安心できた。

わたしは本当にいい友達をもつたなあ♪

お洒落なカフェ（陽花目線）

さあいつものように待ち合わせ時間に遅刻してきた希望の掛け声で乾杯となる。

まったくこの子は時間にルーズなんだからあ……って今日はいろはのお祝いだから大目に見てあげよう。

乾杯が終わりそれぞれのお昼も食べ終わった頃やつぱりこの質問が来た。

美沙が「いろはちゃん、どおーして急に生徒会長になることにしたの？」と言ってきた。

この前いろはは言える時がきたら言うって言ってくれた。

どうしよ？

いろはを見ると

「ええ〜つとお、まず何から話そうかなあ……」と話す気になつてるようだ。それなら

「いろは、言いたくないこともあるかもだから無理しなくてもいいよ」と軽く助け船を出してあげる。

いろはを見たらニコツとしてくれた。

私もいろはがどうして生徒会長になることにしたのか興味はあったから思わず真剣に聞いてしまった。

もしかしたら嫌々なつたのだろうか?とか思ったりもしたんで、いろはからどんな言葉がでてくるのか…

話を聞いていて私は安心した。

いろはは無理やりでも嫌々でもなく、納得して生徒会長になることを選んだみたいだったから。

だけど何?

この話をしている時のいろは…少し楽しそうであり、ワクワクしてる?感じさえあった。

こんないろはを見るのはいつ以来だろう?!

最近つてか中学いや小学校高学年以来、みんなに好かれたくて『可愛いアピール』をしていろは。

男子は少しでもいろはに気に入られようと近づく。

本当のいろはを知らない女子はそんないろはを妬む子も多かった。

だけど私は知っている。

本当の一色いろはを…

そう… あの子、いろはが『可愛いアピール』するのは…

みんなに好かれたくてやってると思ってる。。。みんな

いや、きつというは自身もそう思ってるかもしれない。いや、そう思い込んでいるのかもしれない。

だけど、本当はあの子は、いろはは、嫌われれたくないんだ。

『好かれない』と『嫌われたくない』一見同じに思えるかもしれないが、全然違う!!

あの子は怖いんだろう、嫌われるのが…

だから『可愛いアピール』をしてみんなに好かれようとする。

いろは、それは違うんだよ。

いつか私はいろはに言える日が来ることを望んでいる。

今日のいろはは少し生き生きしているように見える。

いつものようなあざとさもないのに、本当に可愛い。

そう、あの子を妬んでいる女の子には分からないと思う。

本当の一色いろはは、さばさばした可愛い子なんだよ。

大親友の私言うんだから間違いないよ。

本当に今日のいろははいつも以上に可愛い。

大変なはずの生徒会長の話がなんともないように、嬉しそうにさえ話している。

きつとあの子は何かを掴みかけてるんじゃないかな？

。。。きつとそれは話に出てきたいろはに生徒会長を勧めた『先輩』と呼ばれる人なん
だろ。

誰かは分からないけど、私からいろはには聞かない。

きつとその時が来たらいろはから言ってくれと思うから、わたしは待っている。

そして。。。

きつというはは自分でもまだ気づいてないと思う。

あの子はああ見えて意外と鈍いのよね（笑）

いろはが言う『先輩』ってどんな人なんだろう？

3話 教育実習生はあの人だった♡

なんとか生徒会選挙も無事？終わってこれで平和なボツチ生活に戻れると思っ
たら…

今日からこのクラスに教育実習生が来るらしい。

どんな人だろう？

噂では女性らしい。

男子はみんなウキウキし、勝手に想像して実習生が来るのを今か今かと待っている。

女子はというと実習生が女性ということであまり興味がなくなつたのかさして気に
してゐる様子はない。

朝のHRが始まり平塚先生が連れてきたのは…。

あれ？何か見たことある気がするような…。

記憶を辿ってみる、うう、思い出したくないものばかりが浮かんで嫌になつてきた
が、更に辿ると…。

まだ小学校にあがる前、保育園のころに行き着く。

ん？あっ!!!

「やーちゃん？」

思わず驚いて声を出してしまった。

みなさん勘違いしないでね、決して怖い人たちのことじゃないですよ。

クラス中の視線がこちらに向けられる。

俺は俯くがさすがにこの状況ではステルスは発動しない。

ううう、恥ずかしいよお、泣きたい。

「あっ！八幡？」

とその教育実習生はこちらに近づいて来る。

「やっぱり八幡だ。頭良かったんだねー」

と頭を撫でてくる。

何これ？

ボツチには辛い状況なんですが。

恥ずかしい、気持ちいい、もつとお、、、つて違う、恥ずかしい、泣きたい。

「まあ。。。」

何とか答える。

てか、いきなり止めてもらえませんかねー、クラスの視線が。

ふと、由比ヶ浜を見るとぷーつと頬を膨らませこつちを睨んでる。

「何だ、比企谷知り合いかあ」

と、平塚先生はうんうんと頷きながら何故か微笑んでいる。

「家が近いんで小さい頃よく遊んで」

「八幡よろしくねー」

ピシッと敬礼のポーズをする教育実習生。

あざといから・・・

どこぞの美少女生徒会長だよ。

元の位置に戻ると自己紹介が始まった。

「三月弥生つていいます♪これからみなさんと一緒に勉強していききたいと思えます。担当は国語です。よろしくお願います♪」

またピシッと敬礼ポーズ。

小町、一色であざといのはお腹いっぱいなのに、今日からあざと3姉妹?とかもうな

んなの。

男子は「おおお」とか「可愛い」とか言っている。

まあ実際に三月先生は可愛いと言っている容姿をしている。

綺麗と言うよりも可愛いと言う方が合っていると思う。

「三月は大学の後輩になる。みんなよろしくな。」

平塚先生は何故か嬉しそうにしている。

SHRが終わるとやーちゃんが近寄ってきた。

やーちゃんとは小さい頃そう呼んでいたのである。

「八幡久しぶりだね♪」

男子が一斉にこっちを睨む。

こ、こ、怖い。

「・・・あの、みんなの目が怖いんで止めてもらえませんか？」

「いいじゃん。わたしと八幡の仲間じゃん。そんなこと気にしない♪」

ポンポンと軽く頭を叩かれる。

はあ、これはやっつかいなことになったなあ。。。

てか、何かクラスの男子がまだ睨んでるんですけど……
あつ！由比ヶ浜はまだ河豚やってるみたいです。ぷくーつて。
でも、何かプルプルと震えてますけど。

「それじゃ次の授業始まるから行くねー♪八幡また後でねー♡」
と出て行く。

しかもあざとい決めポーズ付きである。

もうやめて、八幡

男子の無言のプレッシャーが怖い。

とりあえず机に突っ伏して授業が始まるチャイムを待つ。

が、突然耳のイヤホンを抜かれた。

顔をあげるとまだブーツと頬を膨らませた由比ヶ浜がいた。

「ヒッキー、あの人とどういう関係？」

由比ヶ浜は何故か少し怒ってるようだ。

何怒ってるの?!

「さっきも言っただろ?家が近いんで小さい頃よく遊んでたって」

「本当にそれだけ?」

「ただそれだけだ」

「ならいいけど..」

ぶつぶつ言いながら戻って行く。

何だったの?

まだ男子の何人かはこつちを睨んでいる。

あつ!チャイム。助かった。

4時間目が終わり購買でパンを買ってペストプレイスに座ると隣に気配を感じた。
また一色かと思つたが違うみたいだ。

「よーしよーしよー」

と、俺の隣に腰を下ろすのは今日から教育実習に来ている三月先生だった。
あれ？何で？

「三月先生どうしてここがわかったんですか？」

「もお、八幡、三月先生はないでしょ？」

「小さい頃みたくやーちゃんでいいのにい♪」

そんなのボツチの俺にはハードルが高すぎる。

「教育実習生でも一応先生なんですからやーちゃんはまずいでしょ？」

「八幡つれないなあ。わたしは全然気にしないのにい♡」

きやるん♪とかやってる、あなたは女子高生かよ！

てか、制服を着ていたらまだ女子高生で通りそうなのが怖い。

「俺が気にしますって」

三月先生の印象はだいぶ変わっていた。

遊んでいたと言っても小学校に入る前のことである。

三月先生は小学生だったが弟が俺と同年つてこともあつて俺もよく遊んでもらつていた。

そんな小さい時の記憶なのに一目見てやーちゃんとわかつてしまった。

ちよつと驚きである。

さすがプロのボツチは並の記憶力ではないのだ。

そんなことを考えながらパンを食べ終え横を見ると三月先生もちょうど食べ終わつたらしく

「八幡は彼女いないの？」

と下から覗き込むように聞いてくる。

その顔はニコニコしていた。

「な、な、何ですかいきなり…。」

と思わず目線を逸らす。

「おつ、その反応はいるのかな。ね、ね、どんな子？」

ともう興味津々で聞いてくる。

「きやの女なんか、い、いましえん」

見事に囁んだし。

「そうなの？まあ、そういう事にしときますかあ」

何故かニコニコしながらまた下から覗き込んでくる。

「今度紹介してねー♪」

と俺の肩をポンポンとしてくる。

ね、ね、話聞いていました？いないって言ったよね。

「だから、いない」はいはい。とところでさ八幡って奉仕部って部活やってるんだってねー
♪

平塚先生に聞いたのだろう。

まさか、

「やつぱり教育実習生だから部活も見ておきたいんだよねー。八幡の部活にお邪魔して
もいいかな？」

きたー!!

予想通りの展開が。。。。

って、これはマズイだろ。

考えただけで、

「いや、うちの部活はあまり活動がないから見ても参考にはならないと思います」

「もつと活気のある部活にしたほうがいいと思います」

「サッカー部とか…」

「いや、いいの。八幡の部活じゃないと面白くないし♪」

は、面白って何？

先生は俺をこの学校から廃除したいんですか？

「まあ何と言われようと平塚先生から許可貰ってあるから勝手に行っちゃうんだけどね
♪」

とニコニコしてる。

いやいや、あなたは魔王ですか？

あざとくて魔王とか一色と陽乃さんを足して2で割ったようになって、もう帰っていいですか？

そんなこんなで、今日の放課後に部活に行きたくなかった俺に追い討ちを掛けるように

「せーんぱーい、ってあれ？」

一色がベストプレイスに駆け込んで来たのである…

最近たまにこのベストプレイスに姿をあらわす美少女生徒会長のおでましである。

あざとい X あざといとか考えただけで疲れてくる。

4話 奉仕部に来た教育実習生♡

「せんぱい、つてあれ？」

きよとんとして俺の隣にいる人物を見て固まっている一色。

何か頬をぶっツとしている。

何これ？可愛い…。これ小動物ですね。

「せんぱい、この人誰ですか？」

おれの制服の袖を掴んでくる。

あざといから。

「あつ、この人は今日から教育実習に来ている三月先生だ。」

「その教育実習の先生が何でせんぱいと一緒にいるんですか？」

まだ頬を膨らませムーツとしながら言ってくる。

いやいや、か、可愛いなんて思っていないんだからね、ちよつとしか。

「てか、お前こそどうしたんだよ？」

そう、最近たまに昼休みにこのベストプレイスにやって来て何をすることもなく軽く話をして帰って行く。

「いや、ふと歩いていたらせんぱいがいるのが目に入ったのでからか…。お話しようかなと思いますして。」

今からかうって言いかけたよね？

別に言い直さなくてもいいけどね。

「八幡、この子は？」

「は、八幡って。。。せんぱいどんな関係なんですか？」

さつきまでは膨れていたが今は俺を睨んでいる。

怖い、いろはす怖いって。

「家が近所で小さい頃よく遊んでたんだ」

ちよっと一色が安心したのか何かブツブツ言っている。

(小さい頃なら大丈夫かな)

「三月弥生です。よろしくね♪で、あなたは？」

「1年の一色いろはといます。」

「こいつ1年で生徒会長やつてるんですよ。」

「そおなんですよお、せんぱいにくまく乗せられて生徒会長やる羽目になったんですよお」

「八幡に？」

何かニコニコしてこつちを見ている。

ははぁーん、とか言つて嬉しそうである。

「はい♪だから責任とつてもらうんです♪」

キヤルン！とあざとく敬礼する。

はいはい、あざとい、あざと可愛い。

「いろはちゃん可愛い♪」

三月先生はそう言う俺の方を向き

「なあ〜んだあ、八幡こんな可愛い彼女がいるんじゃない♪」

「か、か、きやの女なんて。。。」

何故だか頬を赤らめて俯く一色。

「一色はただの後輩「まあ、そういうことにしといたげるよ」

必死に平常を装って言った言葉を遮るように三月先生。

この人やりずらいなあ。。。

まるで誰かのような。。。

そんなことは露知らずチラッと時計を見て

「ほら、そろそろお昼休み終わるよ」

と立ち上がっておれの肩をポンと叩く。

「ほら、いろはちゃんも..」

と一色の肩もポンと叩く。

こういうところはちゃんと先生なんですネ。

おっと早く戻らないとヤバイ。

「せんばいも三月先生もまたです。でわでわ」

パタパタと走っていく一色。

結局あいつは何しに来たんだろう？

「可愛い子ね♡」

と俺の耳元でつぶやく。

顔はニコニコしている。

「あざとい後輩ですよ」

「はいはい。。。」

まったく聞いてないで笑顔で歩いている。

さあ午後の授業だ。

放課後部室に向かってしていると頭に衝撃が・・

ああ、これいつものやつね。

「もお、何で先に行くし」

由比ヶ浜がリュックで頭を殴ってくる。
頬をプツクラと膨らませてながら隣に来る。

「い、いや、一緒に行くとか言っていないし…。」

まったく最近いつもこのパターンだ。

その後は特に会話をするでもなく部室の前に着いた。

「やはろー、ゆきのん」

「うっす」

俺と由比ヶ浜がいつも通り挨拶すると

「こんにちは、由比ヶ浜さん。と、ひ、ひ、ヒキガエルくんだったかしら？」

と文庫本を読みながら答える雪ノ下。

何で小学校時代のあだ名を知ってるんですかねー。

もう雪ペディアなの？

そして俺と由比ヶ浜がそれぞれ自分の席に着くとパタツと本を閉じいつものように
紅茶を入れてくれる。

いつもはコーヒーを飲むことが多いが、雪ノ下の入れてくれる紅茶はおいしい。

午後は紅茶だね。

そういえば、おいしいコーヒを淹れてくれる職業の人をバリスタと言うが、おいしい紅茶を淹れてくれる人は何て言うのだろうか？

雪のスタ？。。。ではないな。

怒られるから言わないけど。

部室はいつもと変わらない風景である。

雪ノ下と俺は文庫本を読み、由比ヶ浜は携帯を弄っている。

と、ガラガラドアが開く。

入ってきたのはもちろん、

「平塚先生、ノックを・・・」

「ああ、悪い悪い・・・ ついな・・・」

と言う先生の後ろには三月先生が。

ほんとこの人は俺たちよりも男っぽいなあ。だから・・・げっ！

こっち睨んでる。何何?!

「おーい比企谷、今変なこと考えていただろう」

ポキポキと指を鳴らしている。

怖い怖い。。。エスパーなの？

「い、いや何も・・・」

助けて、ファーストブリットはもう、：

「まあ、いい。三月が奉仕部に興味があるっていうので連れてきた。」

本来に来たよ・・・

「まあ、部活もいい実習になるだろう。みんなよろしくな。」

「三月もよく勉強するように！」

「はい♪」と敬礼。

どこぞのあざとい生徒会長だよ。

どうやら俺の周りではあざといのが流行ってるらしい。

何それ？

さんなあざとい大セールは勘弁である。

「では、私は仕事があるので・・・」

と教室を出ていく。

しばし沈黙だったが雪ノ下がそれを破る。

「私は奉仕部部長の雪ノ下雪乃です。」

「平塚先生から聞いているわ。私は教育実習で今日からこの学校で勉強させていただくことになった三月弥生です。」

「あ、あたしは由比ヶ浜結衣です。」

「俺は「八幡は知ってるからいいって♪」

俺が自己紹介しようとするのを遮るようにニコツとして言う。

「は、八幡って……」

雪ノ下は不思議そうな顔をして俺と三月先生を交互に見ている。

「ふふふ、雪ノ下さん気になる？」ニヤッ

「べ、べ、別に気にしてなんかいないわ。そこのをあなたが何て呼ぼうと関係ないもの」
珍しく雪ノ下が動揺している。

やはり雪ノ下は気づいたみたいだ。

この教育実習生があの人に似ていることを。。。

「私と八幡は家が近所で小さい頃よく遊んでたの。まあ、世間でいう幼馴染？みたいな感じかな」

雪ノ下はまだ動揺しているのか口をもぐもぐさせているだけだ。

こんな彼女を見るのは本当に珍しい。

そんな雪ノ下をチラッとみて由比ヶ浜が質問する。

「ヒツキーの小さい頃でどんな子でした？」

「あら、由比ヶ浜さんも…ふふふ、とつても可愛くて弟のように思っていたわ」

由比ヶ浜を見つめながら答える。

由比ヶ浜は耳を赤くして少し俯いていたが、

「ヒツキーが可愛いとかありえない」

と言うと

「そうね、比企谷くんの小さい頃なんて想像できないわね」

雪ノ下が続ける。

「ばっかあ、俺だつて小さい頃は可愛かつたんだぞ!!」

「自分で言つてるとかキモイ」

由比ヶ浜が本気で引いている。

「どこからその自信がくるのだから、ナルシス谷くん」

雪の下はいつものように冷たい視線でこつちを見ている。

「ははは、この部活おつもしろーい。で、何やるの?」

と笑顔いっぱい三月先生。

今のどこが面白かつたんだらうか?

俺が2人に罵倒されていただけだ。。。

「平塚先生から聞いてないのかよ」

「平塚先生は行けばわかるって言ってくれただけだし」

「はあ、まったくあの先生は。。。」

と雪ノ下は額に手をおいている。

平塚先生はやっぱり平塚先生である。誰かもらつてあげて。マジで。

トントン

「こんにちは、あれ？三月先生」

美少女生徒会長様のご登場である。

「あつ、いろはちゃんこんにちは♪」

三月先生がこたえる。

「いろはちゃん、三月先生知ってたんだ…」

由比ヶ浜は不思議そうに聞いている。

「はい、お昼休みにちよつと。。。」

と言いながら椅子を持ってきていつもの由比ヶ浜の前に座る。

「お前、生徒会はいいのか？」

「はい、まだこれといった仕事もないですし」

まだ先日就任したばかりでそんなに仕事はないのかな？

「三月先生と一色さん、紅茶はいかが？」

雪ノ下が紅茶の準備をする。

「雪ノ下さん、ありがとうございます。」

「雪ノ下先輩、ありがとうございます。」

2人はお礼を言うと飲み始める。

三月先生は雪ノ下が入れてくれた紅茶を飲みながら、ニコニコしながら3人を交互に見ている。

何か嫌な予感が。。。

「八幡、どの子が彼女なの？」ニヤッ

何それ？

いきなり核爆弾が投下された!!

——空襲警報なんて出てましたっけ？

5話 一色いろはのクリスマスが動き出す♡

「八幡、どの子が彼女なの？」ニヤッ

彼女は雪ノ下、由比ヶ浜、一色、そして俺と順番に見てワクワクと修学旅行前日の中学生みたいな表情をしている。

何ともいえぬ雰囲気か漂っている。

と、口を開いたのはまさかの三月先生だった。

「なーんてね、ヤバイ平塚先輩に呼ばれてるんだった！八幡そんな顔してたらダメだゾ」

じゃあまたねー♪って出て行った。

何だったの？

まったくあの人はよくわからない。

小さい頃に遊んでいたと言ってもほとんど覚えていない。

ましてや、やーちゃんが小学校に入学しちからはまったく遊ばなくなった、いや会っ

てもいないのである。

どこか陽乃さんに似た雰囲気を持ち、一色にも似たあざといこの人にこれからも掻き回されるのだろうか？

(ここからはまたいろは視点です。)

師走も間近となり寒さも段々と厳しくなっていく。

日本には春夏秋冬と四季があるが、最近は気温の高い日が長く夏から秋に変わったの？なんて思っているると急に寒くなり冬かやってくる。

そんな寒くなってきた日の放課後、わたしは平塚先生に呼ばれていた。

職員室から出てくるとはあ。。。と溜息が自然と出てしまう。

平塚先生に呼ばれたのは生徒会の初仕事のことだった。

内容はというと何でもクリスマススのイベントをするらしい。まだそれだけならいいのだけど、海浜総合高校と合同でこのイベントをしなければならぬとのこと。

まだ生徒会に就任したばかりで他のメンバーとのコミュニケーションもうまくとれてないのに、他の高校と合同とか無理ですよね…

しかも明日からその会議が始まるとか急過ぎやしませんかね。

わたしだって普通にクリスマスの予定あるんで平塚先生に少しは抵抗したんですけど、まあダメでした。

平塚先生怖すぎです。

仕方ないです、頑張るしかないですね…

どうしてもその時は奥の手を使えばいいっか♪

何かそう考えたら今まで苦痛でしかなかったイベントの会議も少しは楽しめそうとか考えているわたしがいました。

その夜わたしはいつものように陽花と電話していた。

いつも嫌なこととかあると陽花に電話してしまう。

毎回悪いなあとは思うけどやっぱり小学校からの付き合いだけあってわたしのことを一番分かっている陽花に甘えてしまう。

「はるかあ、面倒くさいことになったよお。。。」

といきなり泣き付くわたし。

「今度はどうしたの？いろは。」

そういえば生徒会長選挙の時は陽花が心配して電話してきてくれたんだったなあ。

わたしは海浜総合高校と合同でクリスマスイベントをすることになったと説明した。

クリスマスイベントは12月24日のクリスマスマスィヴに行われる。

22日が二期期の終業式で23日が祝日なのである。

わたしたち仲良し4人組はクリスマス会をいつもの大好きなカフェにする予定だった。

「まさか24日に生徒会のイベントがあるなんて…」

「いろは、しょうがないよ！いろははうちの学校の代表だもん。そんな落ち込まないで頑張らなきゃダメだよ」

「う、うん。でも、..」

「わたしたちのクリスマス会は次の日にズラせばいいって。いろは予定は？」

陽花の提案を聞いて少し嬉しくなった。

わたしは仲の良い友達とのクリスマスがとても楽しみだったから。それがなくなるのが悲しかった。

「わたしは大丈夫だよ♪」

「じゃあ、希望と美沙には私が聞いておくから、いろははイベント頑張って！海浜総合高校にいるのはの凄さを見せてあげなさい♪」

わたしの凄さって。。。

「わたしに出来るかなあ？」

あはは。

「わたしの親友の一色いろははとても魅力的な真面目に頑張る子だから大丈夫だよ！」

陽花は笑いながら言う。

「一色いろははこの私の親友なんでもん、だから安心して。この私が言うんだから」アハハ

「陽花、ありがとう。てか、陽花どんだけなのよ」

そんな陽花の根拠もない励ましが嬉しかった。

「もし本当にダメと思つたらいつでも言つて！私に出来ることは手伝うよ」
陽花はそう言つてくれた。

それは本当に嬉しいのだけど、出来ることなら余り迷惑は掛けたくない。

「うん、もしもの時はよろしくです♪でも、危なくなつたら奥の手を使うから大丈夫だと
思う♪」

とわたしが言つると陽花は不思議そうである。

「奥の手??」

「そう、ヤバくなつたら奥の手を投入するの♪」

「何それ？奥の手とは何かな？いろはちゃん♪」

陽花は何か楽しそうにニヒヒとか言つてる。

「それはまた話すね♪」

「うん、楽しみに待つてる」

陽花はそう言つるとそれ以上は追求しつこない。

そう、陽花は分かっている。

だからわたしが自分から言い出すまで待つていてくれる。

やはり長い付き合いっていいもんだなあ。
ちゃんとお互いのこと分かり合えて。

わたしもいつか。。。

アレ？何で今せんぱいの顔が浮かんできたんだろう？

わたしは陽花と話せて安心してぐっすり眠れそうだ。

明日から頑張るぞ!!

6話 イベントが始まり一色いろはは…♡

今日は海浜総合高校とのクリスマス合同イベントの会議の初日だった。

結果。。。ダメだあ、まったく何言ってるか分からなかった…

向こうの生徒会長ってか生徒会の人達みんな意識高い系で呪文みたいなカタカナ語が飛び交って、

特に向こうの会長・玉縄って人は何か轆轤回しながら呪文唱えてるみたいで何かの宗教かと思った。

これはもう奥の手・先輩を使…にお願いするしかない!!

早くも初日終わって奥の手の投入を決めちゃうとかわたしってば。。。テヘツ☆

なんて考えながら歩いていたら家についていた。

「後で陽花に電話しよーっと」

わたしはご飯とお風呂を済ませて今自分の部屋にいる。

「もしもし、陽花聞いて聞いて！」

わたしは昨日に引き続き親友の陽花に愚痴を言う為電話している。

陽花にはいつもほんと悪いと思っている。

でも陽花はいつもの様に優しくしてくれる。。。これにいつも甘えちゃうんだよなあ。

「今日はどうしたのいろは？あつ、今日はクリスマスイベント会議の初日だったよね」

「そうそう、それなだけどさあ。。。それが思ってたより大変そうで…」

「大変って？」

「それが、向こうの生徒会長さん轆轤回しながら呪文唱えてて、他の生徒会メンバーもカ

タカナ語の嵐で…」

「あああ、意識高い系ってやつかあ。。。それは厄介だねー」

さすがの学年1位の陽花でも意識高い系は苦手なのか声のトーンが落ちていた。

「そうそう、もう何言ってるんだかわかんなくてさあ…」

「で、いろはどうしたの？」

「うん、、一応はい！とか、そうですねー！とか言っておいた」ハハハ

「まったくあんたは。。。で、これからどうするの?」

「奥の手を使うことにした♪」

「奥の手ってさあ、もしもの時とか最後に出すもんじゃないの?」

「でも、あまり時間ないし、わたしじゃどうにもならなそうだからさ…」

「そっか、いろはが決めたんならいいと思うよ。でも、奥の手って…大丈夫なの?」

「ははは、どうかなあ?前にわたしが生徒会長に立候補させられた時に平塚先生に相談に

言ったら連れていかれた変な部活の話したよね」

「うん、たしか雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩と、あと、えーつと。。。」

「比企谷先輩ね♪」

「そうそう、その部活に相談するの?それが奥の手?」

「うん、まあ生徒会役員選挙お時は結局せんぱいに乗せられて生徒会長になったけど、何て言うか、そ、その

結構頼りになるんだよね。見た目はアレだけど。それに雪ノ下先輩がいたらすごく力強いし、由比ヶ浜先輩は

場の雰囲気とか整えてくれそだし、わたしとしては願ってもない援軍なの。」

「うまくいくといいねー。」

「うん。生徒会長になって初めてのイベントが失敗とか嫌だからさ、成功させたいんだよね♪」

「あはは、何かいろはらしくないけど、いろはらしいね」

とクスクス笑っている陽花。

「でもごめんね。陽花を頼らなくて…これはちよつとガチだから陽花達には迷惑かけれないし、陽花には愚痴を

聞いてもらうっている大事な任務があるしね♪」

「はいはい、わかっているよ生徒会長様！もうはるかあったらあく、プッスカプンスカ」

「ごめんごめんてばー、てか自分でプンスカとか言う人初めて見たわ」アハハ

「これは怒ってるアピールなの！」まったくう

「はいはい、いろはは可愛いねー。でもそんだけ元気なら良かった」

「うん、ありがとうね。じゃまた明日。」

「うん、また明日ね。」

電話をする前は不安でいっぱいだったけど、陽花と話しているとやっぱり落ち着く。

明日からは奉仕部に手伝ってもらえばこのイベントも希望が持てるかもと安心感があつた。。。

そして次の日の放課後わたしは奉仕部の部屋へと向かうのである・・・

7話 一色いろははまたやってきた♡

わたしは今奉仕部の扉の前にいる。

コンコン！

とノックすると「どうぞ」と雪ノ下先輩の声が聞こえたので扉を開ける。

「せんぱーあい、ヤバいです。ヤバいです、ヤバいです。本当にヤバいんです。」

と泣き真似しながら入っていく。

そつと先輩を見るとやはり警戒している。。。

すると

「いろはちゃん、どうしたの？とにかく座って」

と結衣先輩が優しく言ってくれたので、

「あつ、結衣先輩ありがとうございます」

と言って結衣先輩の前の椅子に座る。

あつ、先輩が不審な目で見てる。。。

きつとウソ泣きしてたからだなあ、あはは。

まあいいや。

わたしが座るのを見て雪ノ下先輩が

「とりあえず、話を聞きましょうか」

と声をかけてくれた。

クリスマスイベント一連の話をすると先輩が

「——その企画誰が言い出したんだ？」

と質問してきた。

「向こうからですよー。わたしから言うわけではないですかー。」

と答えると

「だろうな…」

と先輩が言うので続けた…

「で、そんなの普通断るに決まってるじゃないですかー？わたしもクリスマス予定ありますし。」

「断るに決まってるんだ…」

「理由が私的過ぎるだろ…」

と結衣先輩、先輩が続けて呆れたように言ってきた。

あれ？普通は断らないんですかねー？

クリスマスですよ！ク・リ・ス・マ・ス!!

でも、ここは悲しさを打ち出さないと依頼受けてもらえなかつたら困るし。わたしはガックつと肩を落とし、小声でつぶやくように言ってみた。

「でも、平塚先生がやれって言うから…」

先輩はなんか納得したような表情だったのでそのまま続けた。つぶやきで。

「それで初めてみたものの、うまくまとまらないっていうか…」

「他校とじゃそんなもんだろ。気にすんなよ。」

先輩ちよつと優しい、少しはわたしのことに気にかけてくれるんですかね？

でも、

「ていうか、こつち来る前に城廻先輩に相談しろよ」

と疑うような目をしてしながら聞いてきた。

ヤバイ！城廻先輩出されちゃったあ。。。

わたしあの先輩ちよつと苦手なんですよねー。。。

ううう。。。

「えええ、つとまあ、まあ何ていうか、あつ！そう！受験生に迷惑かけるわけに

はいかないじゃないですかー。」

焦つてしまったが、これは正当な理由だろう、きつと。

ここでもうひと押しですね。

「もう先輩たちしか頼れないんですよー」

と言うと結衣先輩と先輩が雪ノ下先輩を見ていたので、わたしも雪ノ下先輩のほうを向くと。。。

あれ？雪ノ下先輩わたしの話聞いてたんですかねー、なんかブーツとしてるんですけど。。。

まあ絶対こんなこと言えないんですけど、、、

すると少し間があり、雪ノ下先輩が視線に気付いたらしく、顎に手をやり考えように

「———そうね…。だいたいのは状況はわかったけど…」

少し間を取って

「どうかしらっ？」

と結衣先輩と先輩に意見を求める感じだった。

前に来た時も変な雰囲気だったけど、今日はまた違う変な雰囲気がした。。。

「いいじゃんやろうよ。」

と言い出したのは結衣先輩。(結衣先輩ナイスです!)

「なんか相談来るなんて久しぶりじゃん。ここ最近こういうのなかったし。だから前みたい。。。」

と俯き加減で言っていた結衣先輩が雪ノ下先輩に向き直して言う。。。。また雪ノ下先輩はブーツとした表情。

どうしたんだろう？

「——ちよつと頑張つてもいいかな？つて。。。思う。。。ん。。。だけど。。。」
雪ノ下先輩の表情を見た結衣先輩はだんだんと尻すぼみになっていく。。。。

(結衣先輩が頼りだったのに。。。)

「そう。ならそれでいいと思うわ。」

と雪ノ下先輩が言う。。。。結衣先輩の表情も少し明るく戻った。

良かったあ、これで少し希望が出てきた。

と思つた瞬間。。。。

「——いや、やめといたほうがいいんじゃないの」

と先輩が言い出した。。。。

えっ、先輩なんでそんなこと言うんですか？決まったと思つたのに。思わず、うっと先輩を見ると

「これは生徒会の問題だ。それに、一色が会長になつていきなり人を頼りにするのもいいことじゃねーだろ。」

と言いながら立ち上がつて顎で出口に行けみたいな感じだった。

これつて。。。

でも、とりあえず反論しながらじゃないとね。

「えー？なんでですかそれー？」

とわたしも席を立ち扉の方に向かう。

先輩にブツブツ言われながら扉の外に出されそうになる。

あれ？これつて先輩が可愛い後輩を追い出すようにするけど、実は自分だけで手伝つてくれるつていうアレですよね?!

じゃあヒロインのわたしが言うのはこれしかない。

「先輩が言うから会長になつたんですよー。なんとかして欲しいですー」

先輩はわたしと一緒に部屋の外に出ると扉を閉めた。

これつて今からの会話を聞かれないように……つまりアレですよ、ドラマとかでも

こうですもん。

とか思っていると。

先輩はわたしの前に来て言った。

「今の話、部としてじゃなく俺が個人的に手伝うってことじゃダメか？」

ほらきた、これは寧ろわたしにとつては好都合。

でも、それを悟られないように。。。

「——まあ、それえもいいですけど。実際先輩一人のほうが扱いやす。。。安心しやすいいとか頼りになるというか。」

ヤバイ本音が出そうで。。。

「ていうか、葉山は。こういうときこそ頼ってうまくやるもんじゃねーの?」

これは先輩がわたしに会長を勧めたときに言っていた利益ってやつだ。

「——ガチ大変だから、葉山先輩にはちよつと迷惑かけちゃうかなって…」

葉山先輩は次期部長としてサッカー部をやってるし実際なかなか頼れないんですねー。
ねー。

それに…

ちよつと顔が暖かくなってきた気がしたわたしは少し笑みを浮かべて先輩を上目遣

いで見ながら言った。

「それに、こういうのって、簡単なことができないのが可愛いつていうか、ミスしたりするのがいんじゃないですかー？」

ガチの厄介ごととか普通に重いつて思われちゃいますよー」

「ああ、そう…」

と言った先輩はちよつと引いたような呆れたような不思議な表情をしていた。

うふふ。

先輩、葉山先輩にも頼めないガチな厄介ごとでも先輩には頼めちゃうんですよ。

「じゃあ、この後校門で待ち合わせしましょう」

「えつ、今日からやんのかよー」

「あまり時間ないんです…」

「じゃ、待ち合わせ場所は変えてくれ。一緒に帰って、友達に噂とかされると恥ずかしいし…」

「はあつ」

わたしは思わず真顔になってしまった。

ツッコんだほうがよかつたんでしょうか？

先輩落ち込んじゃったかな?!

「まあいいですけど…:コミユニティセンターってわかります?そこ集合で…」

「わかった。準備したら行く」

良かった、先輩大丈夫そうだ。

「でわでわ。よろしくです♡」

とニコツとウインクして腰の角度を決めて、敬礼ポーズ♡

先輩はこの後雪ノ下先輩と結衣先輩に何て言うのだろう。

…なんて考えたけど、それよりもこつちも大変なんでそれどころじゃないんですけど。

さあ、わたしの準備してコミユニティセンターに向かわなきゃ。

本当は校門で待ち合わせして、先輩とお話しながら…とかもよかったのになあ。。。

8話 先輩との会議が始まる♡

わたしは先輩との待ち合わせの前にコンビニに寄っていた。
会議の時のお菓子類を買う為です。

向こうだけに用意してもらうんじや悪いですからね。

コンビニで買い物を終えて外に出ると先輩の姿が見えた。

「すいませーん。お待たせしちゃいましたー。ちよつと買い物してまして…」
思わずふうーと息を漏らしてしまった。

すると先輩は「別にいいけど…」

といいながら荷物を持ってくれようとした。

わたしは思わず「はっ」と言つてその手を避けてしまった。

「荷物思いから持ってくれアピールじゃなかったの、今の？」

「あー、いえ今のは素だったんですけど…」

とか言つたけど、先輩つてこういう優しいところあるんだなあ…でも、

「はっ…もしかして今のつて口説こうとしてましたか？ごめんさい、ちよつと一瞬ときめかけましたが冷静になるとやっぱ無理です」

ちよつと先輩にときめいたからの照れ隠しじゃないんですからね。。。

でも先輩は「あつ、そう…」と言いなながらもコンビニの袋を持ってくれた。

ちよつとドツキ…つかしてないですからね。。。

「あつ、ありがとうございます…」

「——別に、仕事の範疇だよ。」

「わあ!!頼れるう!そういうことなら次もお願いしますね♡」

とニコツ♡としたら何やら後ろから声が出た。

「へえ、八幡って意外と男らしいんだね」

この声は、教育実習の三月先生だ。

わあ、ちよつと嫌な人が来たなあ。。。

「別にそんなんじゃないや…、小町にいつも教育されてるだけですから…」

「小町?誰ですか?お米?」

「お米じゃねーよ。俺の妹だ」

「はっ!シスコン?」

「ははは、それは否定できないねー。八幡」

と三月先生が言う。と先輩は少し俯いていた。

「先輩、そろそろ時間になっちゃいますよ。早く行かないと…」

「そうだな、行こう」

「では、先生しつ「じゃあ、行こう!!」

—— っって何で？ 三月先生も一緒に行くの？

あつー平塚先生の代わりかあ。。。とりあえず聞いてみよ。

「三月先生も会議にご出席なさるんですか？」

「そうなの。平塚先生にいい経験だから見てこいつて言われてね」

やっぱりかー。あの独身め、余計なことを・・・

っってこんなの本人には絶対に言えませんが。

まあ、しょおーがない、ここは一緒に行くしかないですね。

「では、急ぎましよう！」

「おつかれさまです」

いつものように中に入ると向こうの生徒はみんなでおしゃべりをしている。

うちの生徒会の人たちは。。。

するとわたしの後ろに先輩の姿をみつけた向こうの会長に呼ばれて近くまで行く。

「僕は玉縄。海浜総合高校の生徒会長なんだ。よろしく！」

「——ああ、ごーも」

「よかったよー。フレツシユでルーキーな生徒会長同士企画できて。お互いリスパクトできるパートナーシップを築いてシナジー効果を生んでいけないかなと思っててさ」

「でたあ、玉縄会長のカタカナ攻撃。」

「さすがの先輩もちよつと呆れた顔をしていた。」

「あれ？そういうえば三月先生は？って思ったらちやつかり部屋の後ろのほうにいた。」

わたしはそのまま玉縄会長に連れられて先輩と離れた。

その時先輩に向かつて「あれ？比企谷？」と言う声があった。

向こうの生徒らしい人が先輩と話をしていた。

なんかその女の人は楽しそうに笑っていた……別に気になってるわけじゃないんですからね。

「せんぱい、お知り合いいたんですか？」

「ここは聞いとかないとね。」

「ああ、まあ中学の同級生だ」

「へえ……」

なんだただの同級生だったんですね。

みんなが席に着きました。

「あつ会議始まつちやいますよ！」

わたしは先輩の腕を掴んで引つ張っていく。

「せんぱいはこちらへ！」

おれは端がいいんだけどとか言ってる先輩を無視して引つ張って行き座らせる。

もちろんわたしの隣に。

会議は始まつたけど前回と同じく向こうの人たちが訳の分からない提案をしてくれ

るが何も決まる気配がない。

しかし玉縄会長の轆轤回しなんとかならないかなー…

あとカタカナばかりの意識高い系？

会議も一息ついたところで先輩聞いてみた。

「だいたいどんな感じかわかりましたあ？」

「いや、何もわかんなかった」

「あー、なんか難しいこと言ってますもんね」

さすがの先輩でもわかんないですね。

「けど、すごいー！とかわたしも頑張らなきゃー！とか言う超うけいいですよ。あとはメールの相手だけしとけばオツケーみたいな感じですよ」

「お前いつか刺されるぞ…」

先輩、わたしのこと心配してくれてるんですかね？

「——でも、先輩も時々あーいう感じですよ。頭良さげっていうか意識高い系っていうか」

とちよつと先輩をからかってみる。

「一緒にするな。おれは意識高い系じゃない。自意識高い系だ」

と先輩はよくわからないことを言ってきた。

「はあ、よくわからないです…」

その後は各校での作業となった

うちはまだ生徒会がうまく機能しない。。。

まだ出来て間もないってのもあるだろうし。。。まだお互いに遠慮があるのが原因だろう。

先輩もそこはわかってくれたみたいだ。

そろそろ時間かなあ… と時計を確認していると三月先生が近寄て来た。

「二人はやつぱり仲いいね♪」

「そんなんじや…仕事ですから」

「そうかなあ… お似合いだと思おうよ♪」

わあ、この人何言ってるんだろ？

先輩をからかっているだけみたいだけど、ちよつと嬉し…くなんかないんだからね。

「せんぱい、そろそろ終わりにしましょうか？向こうも終わるみたいですし」

「そうだな」

と席を立つと三月先生から思わぬ一言が…

「八幡、ちゃんと一色さんを送ってあげないとダメだぞ！もう時間も遅いし」

「そ、そんないいですよ。せんばいに悪いです」

少し嬉しかったけど、恥ずかしいしとりあえず否定してしまった。

「一色もそう言ってるか「八幡!!」」

「はいはい！会長様をお送りいたします」

「よろしい♪」

「せんばい、なんだかすみません…」

「いや、いいよ。最初からそのつ… いや何でもない」

えっ！先輩最初からわたしのこと送ってくれたるつもりだったんだ…

さっきのコンビニの袋持ってくれるとことか、今とかわたしよりあざといと思うんですけど…

「ありがとう(ぎ)ございます♪それじゃお言葉に甘えちやいます♪」

キャラン♪といつもの敬礼ポーズ！

わたし達は向こうに挨拶をして部屋を出た…

9話 せんぱいと の 帰り道 ♡

「せんぱい♪」

わたしは可愛く先輩の顔を覗いてみた。

先輩は恥ずかしいのか視線を逸らしているも答えてくれる。

「ど、どうした?」

やだ、先輩可愛い♡

「こんな可愛い先輩をこんな夜に一人でお家に帰すんですかあ?」

「いや、家で小町が待つてるから早く帰らないと…」

「わかりました。じゃあ小町ちゃんに了解とればいいんですね。せんぱい小町ちゃんのアドレス教えてください」

「いや、小町に黙って教えるわけにはいかんだろ」

「小町ちゃん紹介してくださいよお… わたしだけ会ったことないんですから…」

「いや、お前と小町はあざとい+あざといで…」

「じゃあ先輩が小町ちゃんに連絡してください」はっちまーん!」

とわたしの声を遮り先輩を呼ぶ声が。。。

見ると三月先生がコミュニケーションセンターの出口に向かって走ってくるのが見える。

三月先生まだいたんだ。。。

「八幡というはちゃん。。。おっと。。。」

と先生は会談で躓きよろけている。

∴と先輩が先生の体を支えて先生は転ばずに済んだが・・・

「きゃっ！八幡のえっち、もお。。。まいっちんぐ♪」

と先生はポーズをとっている・・・

先生を支えた先輩の手が先生の胸のところにな。。。 (先生いいなあ。。。)

てか、三月先生それ古くないですかー。まあわたしも知ってますけども。

先輩は顔を真っ赤にしているがまだ手が・・・

「せんぱい、手!!!」

ささっと手を離す先輩。

「もお、八幡たら言ってくれればいつでも揉ませてあげるのに・・・」

「.....」

先輩は俯いて何も言えないでいる。

「あの、三月先生!!!」

「あつ！いろはちゃん、ごめんねー」

「先生、そういう発言どうかと思えますけど…」

「ははは、ところで何してたの？」

「もう時間も遅いのでせんぱいに送ってもらおうと思つたら断られて。。。」

「八幡！それはダメだなあ…。可愛い生徒会長さんを送つてあげなさいね！」

お、三月先生いいことおつしやる。

「しようがない、一色行くぞ」

「はい！ありがとうございます。でも、いいんですか？」

「そりゃ、先生に言われちゃな…」

「それじゃ、気を付けて帰つてね。八幡よろしくね♪」

と先生は帰つていった。

なんかよくわからない人だなあ。。。

まあ、今日だけはお礼言わなくちやですけどね。

「先生も気を付けてくださいね。ありがとうございます♪」

と、先輩と一緒に先輩の自転車が止めてある駐輪場に向かう。

「じゃあ、行くか」

「はい。せんばい♪」

先輩はわたしの歩調に合わせて自転車を押してくれる。しかも、車道沿いのほうを歩いてくれる。

わたしのことあざといあざとい言う割には先輩こそあざとい！

「せんばいって意外と紳士的なんですね♪」

「いや、小町に日ごろから言われてるからな」

「あつ！小町ちゃんに連絡しなくて大丈夫なんですか？」

「そうだな。メール送っておくわ。ちよつと待ってくれ！」

先輩はメールを打っている。

打ち終わって歩いているとすぐに先輩の携帯が鳴った。

小町ちゃんかな？

先輩はメールを確認し、マジか…と呟いている。

「先輩どうしたんですか？」

『小町に一色を送ってから帰るから遅くなる』とメールしたら、『ちゃんと家まで送らな

いとダメだからね。ちゃんとしなかったら夕食抜きだから!!後で確認するから

一色さんに確認してわたしのアドレス教えておいて』って返事来て。。。」

おお、小町ちゃんなんていい妹さんなの。

願ってもないチャンス♪

わたしは嬉しくてニヤケそうなのをこらえて冷静に答える。

「わたしは別に構わないんで小町ちゃんのアドレス教えてください♪」

「お前なんか嬉しそうじゃないか?」

「そりやそうですよ!わたしだけ小町ちゃん紹介されてなかったんですから... これで

...

ほれ!っと先輩は携帯をわたしに渡してくる。

「わ、わたしがやるんですか?」

「一色がやったほうが早いだろ?」

「まあ、そうですね。別にいいんですけど」

小町ちゃんのアドレスをGETしたので、早速メールを送っておく。

『小町ちゃん、いつも先輩にはお世話になってます。総武高校の生徒会長の一色いろはです。ずっと小町ちゃんとお話したいなって思ってたんだ。これからよろしくね♪お兄さん少しお借りしますね♪』

まあ、こんなところかな。

と、また歩き出すとすぐに返事が…:

『一色さん、私も新しいお義姉ちゃん候補が出来て嬉しいです。あんなお兄ちゃんです
がよろしくお願いします。今日はお兄ちゃんにちゃんと家まで送らせちゃつていいで
すので笑』

新しいお義姉ちゃん候補だなんて恥ずかしくなっちゃう…:

「どうした一色？小町何か言ってたか？」

「いえ、全然そんなことないです。『お兄ちゃんにちゃんと家まで送らせちゃつていいで
すので』ですって」

「それじゃあ、とつとと行くぞ！」

「あ、はい。でもその厄介事は早めにみたいな言い方は酷いんじゃないですかねー！」
唇を尖らせ不満そうな顔をする。

「しようがないだろ。本当に早く済ませたいんだから。。。」

「もお、こんな可愛い後輩を家まで送るのの何が不満なんですかねー」

「そういうところがあざといんだよ！」

とか言ってる間に駅に着いた。

電車の中ではお互いに話すこともなく黙っていた。

普通なら男の子と一緒に無言でいたら嫌な雰囲気になってしまいが、先輩と一緒にだと心地よいとまで思ってしまう。

「二色、次の駅だったな…。」

「えっ！せんぱい何でわたしの降りる駅知ってるんですか？はっ！まさか、お前のことは何でも知ってるアピールですか？何でも知ってるからいつでも俺の胸に飛び込んで来いってことですか？ちよつと嬉しいですけどキモいんで無理です。」

お得意の振り芸で先輩に逆アピール！

ってアピールにならないかな？

でも、これ先輩とやるの嬉しかったりするんですよ。

「いや、前に一色が言っていたのを覚えてただけだ…。」

と、降りる駅に着き今は先輩とわたしの家に向かって一緒に歩いている。

相変わらず先輩は車道側を歩いてくれる、ほんとあざとい。

「せんぱい、本当にありがとうございます」

「どうした急に。お前がそんな素直に言うなんてどうした？」

「それはわたしだつてちゃんと感謝してるんですよ！」

「おお、そうかそう言ってもらえると助かる…。」

先輩もいつになく素直な気がするけど、ここはそつとしときましょ。

もう家はすぐそこだ。

先輩と初めて家まで一緒に帰れた。

もつと家が遠かったら良かったのにか思ったけど、普段は一人と思つたら今のまま
でつてことに。

まったくわたしつて…。

「せんばい！ありがとうございます。家そこなんで…。」

「おお、そっか」

「今日はお疲れ様でした。家まで送ってくれてありがとうございます♪」

わたしはキヤルンとおもいつきり可愛く得意の敬礼ポーズをした。

「おう、お疲れ様」

「ではでは、せんばいまた来週です♪」

「ああ、また来週な…。」

と、そこに家の玄関のドアが開きお母さんが顔を見せた。。。